

Title	大学資本主義による研究者間協力への影響：生命科学・材料科学分野におけるマテリアル・トランスファーの事例研究
Author(s)	柴山, 創太郎; 馬場, 靖憲
Citation	年次学術大会講演要旨集, 26: 413
Issue Date	2011-10-15
Type	Conference Paper
Text version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/10119/10151
Rights	本著作物は研究・技術計画学会の許可のもとに掲載するものです。This material is posted here with permission of the Japan Society for Science Policy and Research Management.
Description	一般講演要旨

2 D 1 2

大学資本主義による研究者間協力への影響：生命科学・材料科学分野におけるマテリアル・トランスファーの事例研究

○柴山 創太郎（東京大学 先端科学技術研究センター）
馬場 靖憲（東京大学 先端科学技術研究センター）

1980年代以降、米国を始めとする世界各国において「大学資本主義」（Academic Capitalism）と呼ばれる潮流が進行してきた。この流れの中で大学の研究成果を産業におけるイノベーションに繋げる基盤的な政策やインフラが整備され、実際に産学連携、大学による特許出願、大学研究者による起業などが大幅に増大した。このような効果の一方で、大学資本主義の流れが寧ろ大学研究を阻害しているとの報告が特に米国で最近増えている。例えば、商業活動や産学連携に関与する研究者が研究材料やデータの共有に消極的であったり、論文の出版を遅らせるなどの傾向が指摘されている。即ち、大学資本主義の潮流の中で、アカデミアから産業へのイノベーションの流れが加速する一方で、イノベーションの源泉であるアカデミアにおける研究自体が停滞する可能性が懸念されている。先行研究では、商業活動や産学連携自体に直接関与する研究者の行動が分析されてきたが、我々は、前述のような影響が通常の実験室にも波及しているとの仮説を立て、日本における大学資本主義の環境変化が大学研究者一般の行動・意識に及ぼした影響を検討することを目的とした。特に、大学研究へのネガティブな影響の可能性を検討するために、研究の推進に不可欠とされる大学研究者間の協力関係への影響を分析した。具体的には、生命科学・材料科学分野の大学研究者を対象として、同分野における主要な協力形態の1つである「マテリアル・トランスファー」（研究試料の共有）に焦点を当ててサーベイを実施した。838人（回答率42%）から取得した回答を用いて、以下の分析結果を得た。第一に、米国で指摘されているような「商業活動に関与している研究者は非協力的である」との傾向は確認されなかった。一方で、商業化傾向の浸透度が高い研究コミュニティにおいては、個人レベルでの商業活動の有無に関わらず、研究者間の協力関係が弱まっていることが示された。即ち、研究者の個人主義的な行動は、（個人レベルではなく）コミュニティ・レベルでのノルムの弱体化に起因する可能性があり、より深刻な影響と言える。ここでは単に研究者が協力行動に消極的になるに留まらず、協力要請に対してリターンを要求する傾向が高まっていることが判明した。従来、大学研究では「無条件協力」が前提とされてきたが、大学資本主義の浸透に伴い、「相応のメリットが期待できない協力要請には応じない」という研究者が増えていると考えられる。以上の結果は、大学資本主義の潮流が大学における研究者間の協力関係を妨げ、大学基礎研究というイノベーションの源泉を衰退させている可能性を示唆しており、従来の科学技術政策に再考を促すものである。